

私の太宰

その魅力

大学生のころ、夏冬の休みで青森に帰省するたびに、淡谷悠藏さんの自宅におじやましていた時期がある。ご存じのように、淡谷さんは元社会党の衆院議員。歌手の淡谷のり子の叔父である。

私が新城のお宅に出入りするようになつた一九七〇年代初め、淡谷さんは七十年代半ば。すでに衆院議員ではなかつたが、文筆家としても知られ、ちょうど「なつかしの青森」という回想記を執筆されていたころだ。

淡谷さんの文章はおおいかで芯が太くて独自の叙情を持つてゐる。かねて私は地元紙などで目にする淡谷さんの文章が好きだった。将来、文筆で生きていきた戦前の若いころから農民運動を実践してきた淡谷さ

い気持ちが高まり、私は、ある日突然ひとりで淡谷さんの自宅の玄関に立つていたのである。

今思えば、どこの馬の骨ともしれない文学青年の訪問によく相手をしてくれたものだ。

その日、午後いっぱい話しこんで帰宅すると、両親はあきれ、すっかり恐縮していたが、以後、私は、ずっとうずうしく淡谷さんのお宅に上がりこんでは思いつきの文学論を口にしてみた

何も知らない馬の骨への励ましの意味をこめての言葉だつたが、当時二十代になつたばかりの私は、今までこの淡谷さんの言葉を大きな心の支えとしている。

ある時、私が、自分は将来文筆で生きていくだろうかと尋ねると、淡谷さんは「今にそんなことを考えるのはもないくらい原稿を書きまくらなければいけない日がくるよ」そして「悲しかつたら原稿を書け、悔しかつたら原稿を書け。文筆で生きていくことは、そういうことだ」といった。

まだ死んだんですよ」と、十代半ばとなり、私は、淡谷さんの話していくこともわかるような気がする。長年、無名の庶民の側に立つて政治活動をしてきた「生

んは「新しき村」をひらいた武者小路実篤や芥川龍之介などとも親交があり、そうした貴重な写真を見せてくれたりもした。

ある時、私が、自分は将来文筆で生きていくだろうかと尋ねると、淡谷さんは「今にそんなことを考えるのはもないくらい原稿を書きまくらなければいけない日がくるよ」そして「悲しかつたら原稿を書け、悔しかつたら原稿を書け。文筆で生きていくことは、そういうことだ」といった。

田澤 拓也さん(3)

From.

余談が少し長くなつたが、一度、その淡谷さんに太宰治をどう思うかと聞いたことがある。淡谷さんは「新しき村」をひらいた武者小路実篤や芥川龍之介などとも親交があり、そうした貴重な写真を見せてくれたりもした。

ある時、私が、自分は将来文筆で生きていくだろうかと尋ねると、淡谷さんは「今にそんなことを考えるのはもないくらい原稿を書きまくらなければいけない日がくるよ」そして「悲しかつたら原稿を書け、悔しかつたら原稿を書け。文筆で生きていくことは、そういうことだ」といった。

「書くことなくなつた」

まで、太宰治は一九〇九年(明治四十二)年生まれ。なので干支(えと)は同じトリ年。淡谷さんが一回り上ということになる。

当時もし太宰が生きていれば還暦を過ぎたころとあつて、そういう初老の太宰の作品を読んでみたい気もしますと私がいうと、淡谷さんは即座に「それはどうかな」と首をかしげた。そして「太宰は生きていても

もう書くことがなかつた。だから死んだんですよ」と、いつもの独特的な口調でいった。それゆえに還暦を越えた太宰の作品などは考えにくいというニュアンスだつた。

そのころ、私は、それこそ太宰の作品の熱烈な信奉者です。太宰の「生活実践派」である淡谷さんは即座に「それはどうかな」と首をかしげた。そして「太宰は生きていても

しかし、いまや自分も五十年代半ばとなり、私は、淡谷さんの話していくこともわかるような気がする。長年、無名の庶民の側に立つて政治活動をしてきた「生

活実践派」である淡谷さんは、そのころ、私は、それこそ太宰の「生活実践派」である淡谷さんの言葉といえ、率直なところ、やや違和感

にしてみれば、あの時、太宰の実人生における「生活

苦」とか「体験」などの乏しさと危うさを指摘しているのだと思う。

(ノンフィクション作家)



カット・津島園子